

集中治療室における冠動脈バイパス術後の鎮静： デクスメトミジンとプロポフォールの比較

重松 研二, 岩下 耕平, 比嘉 和夫,
富永 健二, 新田 章子, 安部伸太郎,
香取 清, 仁田原慶一

福岡大学医学部麻酔科学

要旨：冠動脈バイパス術後の人工呼吸管理中ならびに気管チューブ抜管後早期は、心筋虚血の原因となる循環動態の変動を避けるために適切な鎮静が必要となる。今回、冠動脈バイパス術後の人工呼吸管理中の鎮静方法について検討した。2004年から2009年に人工心肺非使用の冠動脈バイパス術を受け、外科系集中治療室入室後にデクスメトミジン(47名)またはプロポフォール(38名)を用いて鎮静した症例で、気管チューブ抜管までの時間、循環動態、術後鎮痛を後ろ向きに検討した。集中治療室入室後、気管チューブ抜管までの時間に両群間で有意の違いはなかった。血圧の変動に違いはなかったが、心拍数は入室後1-3時間でプロポフォール群がデクスメトミジン群より有意に高かった ($P<0.05$)。術後のフェンタニルの使用頻度はプロポフォール群よりデクスメトミジン群が有意に少なかった ($P<0.05$)。冠動脈バイパス術後の鎮静では、デクスメトミジンが、プロポフォールよりも有用と思われる。

キーワード：術後鎮静, デクスメトミジン, プロポフォール, 人工心肺非使用の冠動脈バイパス術